

死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連

松下 姫歌・尾方 綾¹

(2009年10月6日受理)

Relation between Experiences of Bereavement, Images of Death and Attitudes toward Death

Himeka Matsushita and Aya Ogata

Abstract: The purpose of this study was to examine the relationship between experiences of bereavement, images of death and attitudes toward death. As a result of cluster analysis, four types of “Death-Life-Self matrix”, based on psychological distance between images of “Death”, “Life”, and “Self”, were revealed as follows. The cluster 1: “Death separated from Self Group”. The cluster 2: “Death separated from Life and Self Group”. The cluster 3: “All-separated Group”. The cluster 4: “All-close Group”. The effect of these four matrix and experiences of bereavement on attitudes toward death were examined by the two-way ANOVA. The results showed 1) in “Death separated from Self Group” (cluster 1), people who have no experience of bereavement have greater ‘Fear of death’ than people who have experiences of bereavement. 2) In “Death separated from Life and Self Group” (cluster 2), people who have experiences of bereavement do more and deeper ‘Meditations on death’ than people who have no experience of bereavement. 3) “All-close Group” (cluster 4) find more meaning of death for life than “Death separated from Life and Self Group” (cluster 2) and “All-separated Group” (cluster 3).

Key words: experiences of bereavement, attitudes toward death, images of death

キーワード：死別体験, 死生観, 死のイメージ

問 題

1. 死別体験と喪の作業および悲嘆のプロセス

死別体験とは、他者の死を経験することにほかならないが、死別体験を通して人は自分自身の死を経験的に知ることになる。死別体験は人間にとって最もストレスフルなライフイベントであるといわれる。また、抑うつ、不安、身体面の悪化、死亡率の増加、免疫や内分泌の機能低下など、死別体験後には心身に様々な悪影響を及ぼすことが知られている（富田ら、2000）。個人のライフサイクルは必ず他者のライフサイクルと直接的にも間接的にも関連しあいながら進んでゆく。そのため、我々は自分自身の死を迎える前に、数多く

の他者の死に遭遇し、そこから影響を受けることとなる（丹下、2004）。渡邊・岡本（2005）は、死別経験の有無と人格的発達との関連可能性を示唆している。

重要な他者との死別に代表される、愛着や依存の対象の喪失は対象喪失と呼ばれる。対象喪失をどのように受容していくかは、個人が直面する重要な心的課題の一つである。Freud（1926/1970）は、悲哀の果たす効果を説明している。悲哀の作業とは、現実検討によって愛する対象がもはや存在しないということを分かり、全てのリビドーをその対象との結びつきから離すことであるとする。しかし、それにはしばしば反抗が生じ、時間と充ちたエネルギーを消費しながら、ひとつひとつ遂行していくのである。悲哀の作業が完了したあとでは、自我はふたたび自由になって、制止もとれるとされている。

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

遠藤 (2002) によれば、従来の研究で理論化されている死別体験後の悲哀のプロセスは、以下の2種類に大別される。1) 段階的モデル：対象喪失に続いてショック、否認、怒り、自責、絶望、抑うつといった悲哀反応を体験しながら、徐々に別れの受容と別れの決断にいたり、新たな対象へ向かうという過程をたどるとするモデル。2) 課題モデル：死別体験後、その悲哀のプロセスが完了するには、①喪失の事実を受容する、②悲哀の苦痛を享受し乗り越える、③新しい記述や能力を身につけ、故人のいない環境に適應する、④故人を情緒的に再配置し、再び自分自身の生活を始めるという4つの課題があるとするモデル。課題モデルは、段階的に進行するのではなく、悲哀の作業の完了まで互いに絡み合って進行するとされる。信原 (1997) はこの両者が含まれるようなモデルを提唱している。信原 (1997) は中年期の突然の死別者を対象としてその悲哀過程の調査をおこない、悲哀の特徴として①実感の希薄さとやり遺し感、②悲哀の遅延と否認による適應への努力、③死者の理想化、④男性の喪の作業の困難さ、⑤中年期の死別における子供の存在という5つの側面があることを明らかにし、悲哀の心理過程モデルを作成している。

死別体験の悲嘆のプロセスに関する、「段階的モデル」、「課題モデル」、その両者の含まれる信原 (1997) のモデルのいずれも、対象喪失にまつわる悲哀の作業における「状態像」に関するものである点が共通しており、その「特徴」や「経過」を指摘するものであると言える。加えて、これらのモデルは、悲哀の作業の目標として、対象者の死を受け入れ、適應的な生活ができるということが主眼となっていると言える。

このように、悲哀のプロセスの研究では、死別体験をした人がどのような様態をたどるのかに焦点を当てたものが多く、死別体験を考えるにあたり、悲しみを乗り越えるプロセスや、変容の結果を捉えることに重きがおかれることが多い。そのため、こうした研究の盛んな看護領域における知見でも、死別体験をした人が、今どういう状態なのかについて、段階的に捉えるものが多い。これらの知見は、死別体験をもつ人が悲哀を乗り越えるまでに、どのような心的状態が生じ、どのような状態の移り変わりが見られるのか、というアウトラインを示すものとして価値がある。しかし、死別体験の悲哀を「乗り越える」とはどういうことだろうか。そのことを考えるには、「乗り越える」にいたるプロセスにおいて、死別体験をどう捉えるかという側面、すなわち、死生観や価値観の確立や変化を生じさせたり、死について改めて捉えなおしたりするという側面を検討する必要性があるのではないだろうか。

この点に関し、遠藤 (2002) は「親との死別」を経験しても病的悲嘆に陥ることなく通常の日常生活を送っている中年健常者を対象として、死別体験の心理学的意味合いを質的に検討する調査研究をおこなっている。この調査において、親との死別を語る中で、自己の生や自己の死に関する報告が自発的になされていることが指摘されている。

これまで、死別体験と死に対する態度についての関連を検討する調査は多く行われている。しかし、死別体験の有無と死に対する態度の間に、関連はほとんど見出されていない。丹下 (2004) では、「家族や親しい友人との死別体験の有無」と死に対する態度との関連が見出されなかったことについて、“有無”は扱ったが“特徴”は扱ってないという方法上の問題点を指摘している。死別体験においては、死別者がその死をどのように体験したかが重要であると考えられる。

しかし、死別体験をした者がその死をどのように心に受けとめ、体験し、どのようなメカニズムで心的態度の変容に至ったのかを検討するものは少ない。死別体験の悲哀のプロセスに関し、どのように特徴的な状態像が見られ、状態像がどう推移していくかというような、変容の節目の「状態」を捉えるだけでなく、その状態の背後で「どのような心的作業が生じているのか」を捉える必要があると考えられる。つまり、死別体験をした人がその死をどのように捉え、どのように体験したのかということと、どのように心的態度の変容に至ったのかという、死への心的態度そのものを捉えることが必要であると考えられる。

2. 死への心的態度

(1) 死に対する不安・恐怖

人々の死への心的態度の一つとして挙げられるものに、死に対する不安や恐怖がある。人々の死に対する態度を測定した研究では、死に対する不安・恐怖を測定する尺度が多く作成され、用いられている。

死に対する不安や恐怖は、死が、自己や生を否定する、避け得ないもの、自己や生と相容れずわかり得ないもの、自己や生との関係を心的に位置づけ難いもの、などとして体験される際の、存在にまつわる根源的不安であるといえる。同時に、存在の意味、生きる意味への問いをつきつけるものでもある。例えば宗教は本来、こうした死の不安と存在の不安にまつわる根源的問題に対するとりくみとして生じたものであろう。現代は、かつての宗教的な世界観の中での死へのとりくみを、個においてなしていく必要性に迫られている。

こうした意味において、死に対する不安は死を取り巻く信念体系の一部にすぎず、それだけでは全体的な死の態度構造が把握できない (金見, 1994) という指

摘は重視すべきであろう。また、丹下（1999）は死に対する心理を扱う研究では、恐怖に主眼をおいた感情的側面のみではなく、「生」や「死ぬ過程」といった死と切り離して考えることの出来ない部分を含めて多面的に「死」を捉えていくことが必要なのであると指摘している。

(2) 死生観と死のイメージ

丹下（2002）は、「死」という語からの連想語を分類することにより、死生観の構造やその発達差の検討を行った結果、「死」という語からの連想語として「死」のみに関連するカテゴリだけでなく、「生」に関するカテゴリも見出されている。また、死に対して「ネガティブ」な反応だけでなく「ポジティブ」な反応も見られることが示唆された研究（丹下，2002；藤井，2003；石坂，2003，2004）や、死に対して肯定、否定の相反する両方を意味づけている「アンビバレント」が見出された研究（石坂，2003）もある。

以上から、死への心的態度は、恐怖や不安といったものだけではなく様々な感情や捉え方、「生」も含めて捉えた「死生観」という概念を踏まえて捉えていく必要があるといえる。

上記のような「死」や「生」に対する直接的なイメージを問う研究のほか、「死」や「生」を含めた世界観をどのようにイメージしているかに関し、「死」や「生」を内界に位置づける際のより無意識的な視点を抽出しようとする研究がある。松下（2000）は箱庭療法や描画法の基本理論の一つである Grünwald の空間象徴図式の実証的検討のうちの1つとして、空間に世界を感じ取る無意識的な視点を抽出している。図式に含まれる、「死」-「生」、「光」-「影」等の対になる象徴語20語に「自己」を加えた21語をもとにした2語1対、計210対について、各象徴語のイメージが本質的に近いか遠いかを、「1＝本質的に同じ」から「25＝本質的に異なる」までの25段階で評定してもらい（Ramsey, 1968, 1973）、この評定値をもとに多次元尺度法で分析したところ、3次元が抽出された。これらの3次元は基本的に「死」と「生」をどのように位置づけ、「自己」とどのように関連づけているかの違いによると考えられ、各次元に対する個人の重み付け値による分析と空間イメージとの関連についての分析から、「死」と「生」が本質的に近いものとイメージされる次元と、遠いものとイメージされる次元のいずれを重み付けるかで、「死」のイメージと空間イメージが変化することを明らかにしている。

尾方（2007）は、松下（2000）の象徴語評定法を簡便化し、「死」「生」「自己」の3語をもとに、2語1対、計3対について、それぞれの語に感じるイメージの本

質的な近さ・遠さを25段階評定させ、クラスタ分析を用いて検討した。その結果、「死」「生」「自己」の全てを近いものと捉える“近群”、「死」を「生」「自己」と異なったものと捉える“「死」分離群”、全てを異なったものと捉える“分離群”の3群が見出された。さらに、群によって、SD法で測定される「死」「生」「自己」のイメージが異なることが明らかになった。加えて、“「死」分離群”においてはDASで測定される死の不安が高いことが示されたが、DASでは死の不安が低いとされる群の中にも、より無意識的な視点では“「死」分離群”が存在し、SD法でも「死」に恐ろしいイメージを感じていることが明らかとなり、無意識的なイメージ水準での死の捉え方と意識上の死の捉え方にギャップがあり、死の不安として意識されない場合があることが示された。このことから、意識にのぼる死の不安だけでなく、意識上の死に対する態度や死生観についても、死のイメージから検討する必要があると考えられる。また、どのようなイメージを持っているのかということだけでなく、どのように変化し、形成されたのかということを検討することも重要である。

3. 死別体験と死への心的態度

隈元（2003）は、身近な人の死が個人にどう経験され、主観的な生きる意味がどう変化していくか、死別体験をした被調査者に半構造化面接を実施した。その結果、死別体験によって、否定なく死に直面させられた人びとがどのようにそれに取り組むかということは、多くの困難を覚えながらも人間の根源的イメージに出会い、それによって日常生活に生きる自分自身の生の意味それ自体を変化させる体験であるとしている。

このことから、死別体験を経て死の受容や人格の発達などに至るプロセスでは、死のイメージの変容や、自分自身の生の意味の変化が体験されると考えられる。

このように、死への心的態度や死のイメージについて、死別体験との関連を検討することは重要であると考えられる。また、死別体験についても、その死を悲しんだり、受容する過程の背景に、死をどう体験し、どのようなイメージを持つかということや、死のイメージの変容があると考えられる。このことから、死への心的態度や死のイメージと死別体験との関連について検討することは重要であるといえる。

4. 本研究の視点

以上の諸点をふまえ、本研究では、死別体験の有無と死への心的態度すなわち死生観との関係を捉える際に、その背後にある、より無意識的な「死」「生」「自己」の内的位置づけの視点を加えることにしたい。すなわち、死別体験でどのような段階を踏んだのかということや、死別から今までの体験を追うということ

はなく、死別体験を経た場合は、今どう死を捉えているのかということ、意識レベルの死生観とより無意識的レベルの「死」「生」「自己」イメージから明らかにする。また、死別体験のない場合との違いや、無意識レベルの「死」「生」「自己」イメージによる違いについても明らかにする。

方法としては、意識水準の死への心的態度の指標として、丹下 (1999) の「死に対する態度尺度」を用いる。この尺度は死に対する態度を多面的に測定する尺度であり、「死に対する恐怖 (尺度1): 存在の消滅や死の未知性、未完の終結等への恐怖を表す尺度であり、高得点ほど死を恐れることを表す」、「生を全うさせる意志 (尺度2): 自殺の否定および状況は問わず“生”自体が目的であるとする考えの尺度であり、高得点ほど困難な状況下でも最後まで生き続けようとすることを表す」、「人生に対して死が持つ意味 (尺度3): 死が人生に肯定的な作用を持つとする認識の尺度であり、高得点ほど死という事象の存在が人生に対して肯定的な意味を持つと認識することを表す」、「死の軽視 (尺度4): 死を他人事や苦難からの解放とする見方の尺度であり、高得点ほど死を他人事や苦難からの解放とみなすことを表す」、「死後の生活の存在への信念 (尺度5): 靈魂永続性の信念の尺度であり、高得点ほど死後の存在を信じることを表す」、「身体と精神の死 (尺度6): 身体の生より心の死を重視する気持ちの尺度であり、高得点ほど身体のみの方に生に執着しないことを表わす」という6下位尺度から成っている。

無意識的イメージ水準の死への心的態度の指標としては、松下 (2000) や尾方 (2007) 同様に、「死」「生」「自己」の捉え方を検討することとする。「死」「生」「自己」を自身でどのように位置づけているのかという指標は、生を含めた死をどう捉えているのか、そこに自分をどう位置づけているのかというものを表すと考えられ、これはその人が持つ死生観を検討する上での一つの大きな視点となると考えられる。このように、「死」「生」「自己」を心的にどう位置づけているのかという指標を、“死-生-自己マトリックス”と名づけ、イメージ水準における死への心的態度の指標として用いる。

また、死別体験については、死別者にとって、その死がどのような体験かが重要であることは述べてきた。そのため、本研究では、誰と死別したのかということや、いつ死別したのかといった条件をこちらから定めることはせず、被調査者が重要であると感じる死別体験について問うこととした。

目 的

本研究では死別体験と死への心的態度の関連について、意識水準と無意識的イメージ水準から検討することを目的とする。

方 法

対象者: 大学生158名 (男性52名, 女性102名, 不明4名, 平均年齢19.68歳, SD=1.54)。データに欠損がある場合は、分析ごとに除外した。

手続き: 集団法および個別法で質問紙調査を実施。倫理的な面を配慮し、教示 (質問紙表紙および口頭) で質問に“死”を主題としたものが含まれていること、いつでも回答の拒否ができるということを明示し、同意書に署名の上、質問紙冊子に回答してもらった。

質問紙: ①「死」「生」「自己」のイメージについて、2語1対からなる3対に対し、各イメージの主観的な非類似度を問う質問3項目 (尾方, 2007)。²⁵段階評定。②死に対する態度尺度 (丹下, 1999) 6下位尺度からなる38項目5件法。および、死への思索を問う2項目を追加。③死別体験について問う質問項目 (重要な他者との死別体験の有無など)。

結 果

1. 死-生-自己マトリックスの分析

「死」「生」「自己」それぞれのイメージに関し、主観的な非類似度を問う3項目についてクラスタ分析 (Ward法) を行った。その結果、4クラスタが抽出された。各クラスタの特徴を検討するため、「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問う3項目を従属変数とする分散分析を行った (Table 1)。

Table 1より、クラスタ1は、「死」と「生」は近いと捉えているが、「死」を「自己」とは離して捉えている。「死」と「生」が近いと認識しているが、「死」を自分に関わりのあるものと捉えていないと考えられる。そこで、クラスタ1を“死-自己分離群”と名づける。クラスタ2は「死」のみを「生」「自己」から離して捉えている。クラスタ3は、「死」「生」「自己」を全て離して捉えている。クラスタ4は「死」「生」「自己」を全て近いものとして捉えている。クラスタ2から4は、尾方 (2007) の結果を支持するものであり、尾方 (2007) に倣い、クラスタ2を“死分離群”、クラスタ3を“全分離群”、クラスタ4を“全近接群”と名づける。以下、これらのクラスタを、死-生-自己マトリックスのクラスタとして扱う。

Table 1 「死」「生」「自己」イメージの非類似度によるクラスタの特徴：各クラスタにおける「死」「生」「自己」イメージの非類似度の平均値および分散分析結果

項目	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	F値	下位検定
生-死	平均値 7.35	18.21	13.92	3.17	90.26 ^{***}	2>3>1>4
	SD 3.90	4.57	7.85	2.23		
生-自己	平均値 8.46	5.66	20.50	8.44	67.66 ^{***}	3>1, 4>2
	SD 4.74	2.74	3.02	5.55		
死-自己	平均値 18.35	14.45	21.08	7.54	47.90 ^{***}	3, 1>2>4
	SD 3.24	7.26	3.46	4.43		

(^{***} $p < .005$, ^{**} $p < .01$, ^{*} $p < .05$, [†] $p < .10$)

2. 死に対する態度との関連

上記の死-生-自己マトリックス4群それぞれについて、死別体験の有無による内訳を算出した。Table 2は、死別体験の有無と死-生-自己マトリックスのクロス集計表である。

Table 2 各群のクロス集計表

	死-生-自己マトリックス				合計
	「死-自己」分離群	「死」分離群	全分離群	全近接群	
死別体験 あり	23	34	13	29	99
なし	21	13	10	11	55
合計	44	47	23	40	154

死別体験の有無および死-生-自己マトリックスと、死に対する意識的態度との関連を検討するために、死に対する態度尺度の各下位尺度について、死別体験の有無(2)×死-生-自己マトリックス(4)の2要因の分散分析を行った。死に対する態度尺度においては、逆転項目の処理を行い、各下位尺度に含まれる項目の得点を合計し、被調査者ごとに下位尺度得点を算出した。

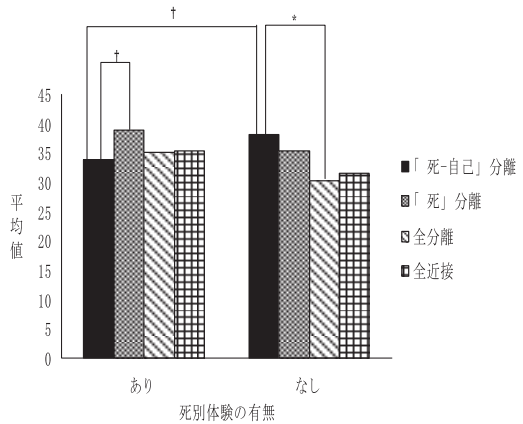
(1) 尺度1：死に対する恐怖

Table 3は「死に対する恐怖」の分散分析の結果である。交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行った (Figure 1)。

Table 3 死別体験の有無および死-生-自己マトリックスと「死に対する恐怖」の関連についての分散分析結果

	平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験 あり	36.19	8.05	120.72	1	120.72	2.15	
なし	34.78	7.28					
死-生-自己マトリックス 「死-自己」分離群	35.95	7.71	421.50	3	140.50	2.50 [†]	2>4, 3
「死」分離群	37.98	8.15					
全分離群	33.04	7.04					
全近接群	34.23	7.32					
交互作用			518.97	3	172.99	3.07 [*]	

(^{***} $p < .005$, ^{**} $p < .01$, ^{*} $p < .05$, [†] $p < .10$)



(^{***} $p < .005$, ^{**} $p < .01$, ^{*} $p < .05$, [†] $p < .10$)

Figure 1 「死に対する恐怖」における死別体験の有無と死-生-自己マトリックスの交互作用

Table 3より、「死」分離群が、全近接群、全分離群よりも「死に対する恐怖」の平均値が高い傾向が見られた ($F(3) = 2.50, p < .10$)。Figure 1より、死別体験なし群において、「死-自己」分離群が、全分離群よりも有意に高かった。あり群においては、「死」分離群が、「死-自己」分離群よりも平均値が高い傾向が見られた。また、「死-自己」分離群においては、死別体験なし群が、あり群よりも平均値が高い傾向が見られた。

(2) 尺度2：生を全うさせる意志

Table 4は「生を全うさせる意志」の分散分析の結果である。「生を全うさせる意志」において有意な差は得られなかった。

Table 4 死別体験の有無および死-生-自己マトリックスと「生を全うさせる意志」との関連についての分散分析結果

	平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験 あり	31.74	4.33	50.58	1	50.58	2.58	
なし	30.59	4.56					
死-生-自己マトリックス 「死-自己」分離群	31.29	4.24	33.02	3	11.01	.56	
「死」分離群	31.91	4.35					
全分離群	30.13	4.44					
全近接群	31.31	4.43					
交互作用			58.10	3	19.37	.99	

(3) 尺度3：人生に対して死が持つ意味

Table 5は「人生に対して死が持つ意味」の分散分析の結果である。

Table 5より、死別体験あり群が、なし群よりも人

生に対して死が持つ意味尺度の平均値が高い傾向が見られた ($F(1) = 3.73, p < .10$)。また、全近接群が、「死」分離群よりも平均値が高い傾向が見られた ($F(3) = 2.29, p < .10$)。

Table 5 死別体験の有無および死一生一自己マトリックスと「人生に対して死が持つ意味」との関連についての分散分析結果

		平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験	あり	23.16	3.01	37.59	1	37.59	3.73 [†]	
	なし	22.51	3.63					
死-生-自己マトリックス	「死-自己」分離群	23.18	3.10	69.03	3	23.01	2.29 [†]	4>2
	「死」分離群	22.00	3.41					
	全分離群	22.91	3.40					
	全近接群	23.71	3.00					
交互作用				62.66	3	20.89	2.08	

(** $p < .005$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$)

(4) 尺度4：死の軽視

Table 6は「死の軽視」の分散分析の結果である。「死の軽視」において有意な差は得られなかった。

Table 6 死別体験の有無および死一生一自己マトリックスと「死の軽視」との関連についての分散分析

		平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験	あり	16.44	3.79	.15	1	.15	.01	
	なし	16.70	3.76					
死-生-自己マトリックス	「死-自己」分離群	16.43	3.47	9.72	3	3.24	.22	
	「死」分離群	16.77	4.44					
	全分離群	16.48	3.41					
	全近接群	16.40	3.54					
交互作用				47.80	3	15.94	1.10	

(5) 尺度5：死後の生活の存在への信念

Table 7は「死後の生活の存在への信念」の分散分析の結果である。「死後の生活の存在への信念」において有意な差は得られなかった。

Table 7 死別体験の有無および死一生一自己マトリックスと「死後の生活の存在への信念」との関連についての分散分析結果

		平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験	あり	11.93	3.43	21.54	1	21.54	1.69	
	なし	11.02	3.77					
死-生-自己マトリックス	「死-自己」分離群	11.47	3.99	31.46	3	10.49	.82	
	「死」分離群	11.49	3.49					
	全分離群	11.09	3.07					
	全近接群	12.18	3.50					
交互作用				49.37	3	16.46	1.29	

(6) 尺度6：身体と精神の死

Table 8は「身体と精神の死」の分散分析の結果である。「身体と精神の死」において有意な差は得られなかった。

Table 8 死別体験の有無および死一生一自己マトリックスと「身体と精神の死」との関連についての分散分析結果

		平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験	あり	12.11	2.24	.30	1	.30	.06	
	なし	12.05	2.08					
死-生-自己マトリックス	「死-自己」分離群	12.42	2.18	9.04	3	3.02	.62	
	「死」分離群	12.13	1.84					
	全分離群	11.96	2.36					
	全近接群	11.76	2.44					
交互作用				1.11	3	.37	.08	

(7) 死の思索

Table 9は「死の思索」の分散分析の結果である。死一生一自己マトリックスの主効果が見られた。また交互作用が見られたので、単純主効果の検定を行った (Figure 2)。

Table 9 死別体験の有無および死一生一自己マトリックスと「死の思索」との関連についての分散分析

		平均値	標準偏差	平方和	自由度	平均平方	F値	下位検定
死別体験	あり	6.30	1.96	7.95	1	7.95	2.15	
	なし	5.88	2.08					
死-生-自己マトリックス	「死-自己」分離群	6.09	1.96	58.10	3	19.37	5.22 ^{***}	4>2, 3
	「死」分離群	5.74	1.98					
	全分離群	5.61	1.62					
	全近接群	6.98	2.08					
交互作用				27.16	3	9.05	2.44 [†]	

(** $p < .005$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$)

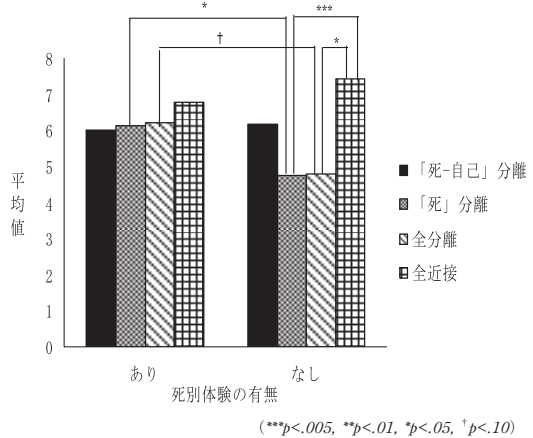


Figure 2 「死の思索」における死別体験の有無と死一生一自己マトリックスの交互作用

Table 9より、全近接群が、「死」分離群、全分離群よりも有意に死の思索の平均値が高かった ($F(3) = 5.22, p < .005$)。Figure 2から、死別体験なし群において、全近接群が、「死」分離群、全分離群よりも有意に平均値が高かった。また、「死」分離群において、死別体験あり群の方が、なし群よりも有意に平均値が高く、全分離群においても同様の傾向がみられた。

考 察

1. 死—生—自己マトリックスについて

尾方 (2007) では、全てに近いものと捉える“近群”、「死」を「生」「自己」と異なったものと捉える“「死」分離群”、全てを異なったものと捉える“分離群”の3群が見出されている。今回は、「死」と「生」は近いと捉えているが、「死」を自分とは離して捉えている“「死—自己」分離群”という新たな群が得られた。「死」と「生」が近いもの、連続しているものであるということを概念として捉えられているが、「死」を自分に関わりのあるものとして捉えていないと考えられる。それ以外については、先行研究とほぼ同じ結果が得られた。今回は、「死」のみを「生」「自己」から離して捉えているクラスタ2を“「死」分離群”、全て離して捉えているクラスタ3を“全分離群”、全て近いものとして捉えているクラスタ4を“全近接群”とした。

4つのクラスタのうち、クラスタ1“「死—自己」分離群”、クラスタ2“「死」分離群”、クラスタ4“全近接群”は、松下 (2000) で得られた3次元と共通しており、今回の結果は、従来の知見を支持しつつ、さらに「死」「生」「自己」の無意識的な内的位置づけの視点を明確に捉えることのできる視点が得られたという意味で価値があると言える。

今後、被調査者を増やし、より詳細な検討を行うことが必要であると考えられる。更に、中年期や老年期に当たる人々に実施し、それぞれの発達段階での違いから考えていくことも必要であろう。

2. 死別体験の有無と死のイメージおよび死に対する態度との関連

本研究の結果から、死別体験の有無と死のイメージおよび死に対する態度との関連について、以下のような点が示唆された。

(1) 死別体験の有無はそれだけでは意識上の死生観に関連が見られなかった。

しかし、死別体験がある群がない群に比べて、「人生に対して死が持つ意味」を認識する傾向が見られた

(Table 5)。

「人生に対して死が持つ意味」は、死が人生に肯定的な作用を持つとする認識の尺度で、高得点ほど死という事象の存在が人生に対して肯定的な意味を持つと認識することを表す。今回の結果は、意味があると言えるレベルではないが、大切な者との死別体験があると、死のイメージのパターンなど関係なく、人生に対して死は肯定的な作用を持つという認識が高い傾向があるかもしれない。大切な者を亡くするという経験は、自身の死をより現実的に感じる一方で、「死」という事象がこれから生きていくためには重要な意味を持つということを感じたり、その死別体験が自分の人生の中で重要な位置付けであると感じたりすることにつながると考えられる。

丹下 (2004) では、死別体験の有無が死に対する態度に異なる影響を与えるか検討した結果、有意差が見られなかった。その結果を受け、身近な人との死別体験の“有無”が個人の死に対する態度に明確な差異をもたらすのは児童期までであり、青年期以降は他の要因—例えばメディアを通しての死の体験や、生や死に関する個人の思索などが大きくなるため、死別体験の“有無”では有意な差が示されなくなるという可能性も考えられるとしている。また、死別体験の“特徴”は扱っていないという方法上の問題点も指摘している。

死別体験は、その死がどのような体験と捉えているかが重要であるという観点から、本研究では、被調査者が“大切”と感じる者との死別体験について問うている。そのような教示から、死別体験の“有無”だけではない面を捉えようとしたが、先行研究と同様、死別体験の有無だけでは死に対する態度について有意な差を見出すことはできず、先行研究同様、死別体験の有無だけでは死に対する態度に差は見られないということが明らかになったといえる。ただし、次に述べるように、死のイメージという視点を含めることによって、死別体験と死に対する意識的態度の違いが見られる。

(2) 死に対する態度における「死に対する恐怖」と「死の思索」において、死別体験の有無×死のイメージ(死—生—自己マトリックス)の交互作用が見られた。

① 「死に対する恐怖」(Figure 1)

死別体験がない場合、「死—自己」分離群は、全分離群より「死に対する恐怖」高いことがわかった。死別体験がある場合、「死」分離群より「死—自己」分離群の方が「死に対する恐怖」が低い傾向があることがわかった。また、「死—自己」分離群は、死別体験がない場合よりもある場合の方が、「死に対する恐怖」が低くなる傾向が見られた。

「死-自己」分離群において「死に対する恐怖」は、死別体験がない場合よりもある場合の方が低くなるといえる。一方でその他のクラスは、死別体験がある場合もない場合も「死に対する恐怖」の程度に差はない。「死-自己」分離群は生と死は近いもの、連続性を持ったものと捉えているが、自分と死とは結び付けられないという群であるといえる。このような捉え方をする者にとって、死別体験とは、死の恐怖を増幅するものではなく、自分自身の死の恐怖と向き合い、乗り越える経験になるものではないかと考えられる。または、死を自分とは離して捉えるところから、死別を経験しても「自分（の死）とは関係ない」としてしまい、死の恐怖の軽減につながっている可能性も考えられる。どちらにしろ、死を自分とのみ離して捉えている者にとって、身近な死別体験とは非常に影響力のあるものであるといえるであろう。今後、「死-自己」分離群における死別体験や死の捉え方について、その質的な部分をより詳細に検討する必要があると言える。

②「死の思索」(Figure 2)

死別体験がない場合、全近接群が「死」分離群や全分離群よりも「死の思索」が多い、もしくは深いことがわかった。また、「死」分離群においては、死別体験がある場合、ない場合よりも「死の思索」が多い、もしくは深いことがわかった。同様に、全分離群においても、死別体験がある場合、ない場合よりも「死の思索」が多い、もしくは深い傾向が見られた。

全近接群は生のみならず死も自分と近く捉えている。このような捉え方と「死の思索」との関連が見られたことは、死をより身近に感じている者は普段から死に関する思索をする機会が多かったり、より深く思索したりしていることを表す。また、「死」分離群や全分離群は死別を経験することによって「死について考える」ようになると言える。死を生や自分から切り離して捉えている「死」分離群や、全てを離して捉えている全分離群は、普段から死を考える機会が少なかったり、あまり深く考えることがなかったりすると考えられるが、死別を経験することにより、死を意識し、考える機会になっていると言える。

また、死別体験なし群においては「死の思索」に対して、各死-生-自己マトリックスの特徴が表れているといえる。しかし、死別体験あり群の中では死-生-自己マトリックスの違いは「死の思索」に影響していない。このことから、死別体験は、死や生の捉え方、死生観の違いに関わらず、死を考える機会を与えらるだろう。そういった意味でも、死別体験は、私たちの死に対する態度や死生観に影響を与えるものになっていると考えられる。

(3) 死-生-自己マトリックスによる主効果が見られた (Table 3, Table 5, Table 9)。

全近接群が、「死」分離群や全分離群よりも、「死の思索」が多い、もしくは深いことがわかった。また、有意傾向ではあるが、「死」分離群が、全分離群、全近接群よりも「死に対する恐怖」が高く、全近接群が、「死」分離群よりも「人生に対して死の持つ意味」を認識している傾向が見られた。

「死」「生」「自己」は近いと捉える全近接群は、普段から死について考える機会があると考えられる。また、死を離して捉えている「死」分離群や全分離群は、死の思索を避けている可能性も考えられる。

また、「死」分離群が死の不安が高いということは、尾方 (2007) でも示されている。自分と生を強く結びつけ、死を生や自分から離して捉えているというあり方と、死の不安や恐怖との関連があると考えられる。また、全分離群と全近接群については、死に対する恐怖が低いという結果は同じであるが、それぞれの死の捉え方による違いがあると考えられる。全分離群は「死」「生」「自己」を全て離して捉えている。松下・尾方 (未発表) では、今回の全分離群にあたる「分離群」は、「生」や「自己」を肯定的に捉えられないことが、死の不安の低さにつながっているという可能性が示唆されている。死を受け入れているために死に対する恐怖が低いというのではなく、「生」や「自己」に肯定的に向き合えないあり方が、今回も死に対する恐怖の低さに表れたと考えられる。

今回の全近接群にあたる「近群」に関しては、「生」にアンビバレントなイメージを抱いていることと死の不安に低さに関係が見られている (松下・尾方、未発表)。一方で、全近接群が、「死」分離群よりも「人生に対して死の持つ意味」を認識しているという傾向から、生に対してアンビバレントなイメージを抱くというだけでなく、死を人生の中で意味のあるものと位置づけるようなあり方も、死に対する恐怖の低さにつながっている可能性も考えられる。

「死」分離群における「人生に対する死の持つ意味」の平均値の低さは、死を肯定的に捉える認識の低さにつながり、これも死に対する恐怖の高さにつながっている可能性も考えられる。「死に対する恐怖」の結果と「人生に対して死の持つ意味」の結果が一部反対であったということは、興味深い結果といえるだろう。

(4) 「生を全うさせる意志」、「死の軽視」、「死後の生活の存在への信念」、「身体と精神の死」については、死別体験の有無や、死のイメージ (死-生-自己マトリックス) との関連は見られなかった。

「生を全うさせる意志」は、自殺の否定および状況は問わず「生」自体が目的であるとする考えの尺度であり、高得点ほど困難な状況下でも最後まで生き続けようとすることを表す。丹下(1999)の調査では、平均値30.07であり、被調査者は全体的にいかなる状況でも生き続けることを望むという反応であったと示されている。本研究でも、どの群も丹下(1999)とほぼ同様の値を示しており、死別体験の有無や死のイメージのあり方などに関わらず、いかなる状況でも生き続けることを望むという態度を示していると考えられる。また、自殺の是非などは、個人の価値観だけでなく、社会的な望ましが反映している可能性も考えられる。

「死の軽視」は死を他人事や苦難からの解放とする見方の尺度であり、高得点ほど死を他人事や苦難からの解放とみなすことを表す。このような態度において、死別体験の有無や死のイメージのあり方の関連は見られないといえる。丹下(1999)の調査では、平均値17.32であり、本研究では、どの群においてもやや低い平均値を示している。死を他人事と捉えるような項目などについて、社会的な望ましが反映している可能性も考えられる。

「死後の生活の存在への信念」は靈魂永続性の信念の尺度であり、高得点ほど死後の存在を信じることを表す。死後の生活の存在や、靈魂の存在に関する態度は、死別体験の有無や死のイメージのあり方とは関連しないと考えられる。死別体験の有無と関連がないということは先行研究でもいくつか示されているが(丹下, 2004など)、本研究により、死一生一自己マトリックスという、死のイメージの捉え方と、死後の生活の存在や、靈魂の存在に対する態度やイメージについても、関連が見られないことが明らかになった。今後、死一生一自己マトリックスで捉えられる死のイメージについて、より詳細に検討する必要があるだろう。

「身体と精神の死」は、身体が生より心の死を重視する気持ちの尺度であり、高得点ほど身体のみを生に執着しないことを表す。丹下(1999)では、平均値12.97が得られており、このことについて、平均的には、身体のみを生を無意味とし、潔く切り捨てることを認める方向の反応が示されたと述べられている。本研究においても、ほぼ同様の値が得られている。死別体験の有無や死のイメージなどとは無関係に、身体のみを生を無意味とし、潔く切り捨てることを認めるというあり方を持っていると考えられる。

総合考察

本研究では死別体験と死への心的態度について、意識水準と無意識的イメージ水準から、その関連を検討することを目的として、調査を行った。

死別の対象を“大切な方”と教示し、被調査者が重要であるとする死別体験を検討しようと試みたが、死別体験の有無だけでは、死への態度との意味のある関連は見出されなかった。死別体験がある場合、ない場合よりも、死という存在が人生に対して肯定的な意味を持つと認識しているという傾向は見られた。

死のイメージ(死一生一自己マトリックス)、すなわち、「死」を「生」や「自己」との間でどのように内的に位置づけているかという無意識的視点については、①「死」と「生」は近いと捉えているが、「死」を自分とは離して捉えている“「死-自己」分離群”、②「死」を「生」「自己」と異なったものと捉える“「死」分離群”、③全てを異なったものと捉える“全分離群”、④全てに近いものと捉える“全近接群”の4つの視点があることが明らかとなった。

意識的な死生観に対し、死別体験の有無と無意識的な死のイメージ(死一生一自己マトリックス)の交互作用が認められ、死別体験の有無に加え、どのような死のイメージを持っているのかということによって、死に対する態度が異なることが示された。

①「死-自己」分離群、すなわち、死と生、生と自己は近いものと捉えながら、死と自己を離して捉える群においては、死別体験をもつと、もたない場合に比べて、死の恐怖が低くなることが明らかとなった。

②「死」分離群、すなわち、死のみを生や自己から引き離して捉える群においては、死別体験をもつと、もたない場合よりも「死について考える」ようになることが明らかとなった。

③死別体験の有無に関わらず、どのような死のイメージを持っているか(死一生一自己マトリックス)の違いによって、死への態度が異なることが示された。全近接群、すなわち「死」「生」「自己」は近いと捉える群は、普段から死について考えており、死分離群、すなわち死を離して捉えている群は、死の思索を避けている可能性があるということが明らかとなった。

本研究から、意識水準での死に対する態度について、死のイメージの捉え方のパターンによって、死別体験が、死に対する態度のある側面に大きく作用することが明らかとなった。さらに、死のイメージの捉え方のパターンが同じであっても、死別体験がある場合とない場合によって、死に対する意識的態度に差が見られることが明らかとなった。このことは、死を生、自己

との間に感じている「近さ」「遠さ」の質が変容していることを示唆する。死別をどう体験したのかということや、死への心的態度について、意識水準からだけではなく、死のイメージも踏まえて検討することが必要であり、さらにイメージの質的側面についても検討する必要があると考えられる。

【引用文献】

- 遠藤みち恵 (2002). 中年期健常者の親の死の受容と悲嘆のプロセス 心理臨床学研究, 19(6), 631-637
- Freud, S. (1926): *Hemmung, Sympotpm und Augst*. Wien: *Internationale Psychoanalytischer Verlag*.
- 井村恒郎 (訳) (1970): 制止, 症状, 不安 フロイト著作集 6 自我論・不安本能論 人文書院, pp.320-376.
- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ: テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155
- 石坂昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討——死に対する心理の理解(1)—— 日本心理学会第67回大会, 300
- 石坂昌子 (2004). 死の意味づけの関連要因の検討——死の対する心理の理解(2)—— 日本心理学会第68回大会, 289
- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究 大阪市立大学文学部紀要, 46, 1-28
- 隈元みちる (2003). 死別による生の意味の変化に関する一考察——「異界」との関わりのなかから—— 心理臨床学研究, 21(1), 25-33
- 松下姫歌 (2000). Grünwald の空間象徴理論における「死」の象徴性の二側面 箱庭療法学研究, 13(1), 73-88
- 尾方綾 (2007). 青年期における死の不安と死のイメージとの関係 広島大学卒業論文
- 信原孝司 (1997). 死別による配偶者喪失後の悲哀過程に関する一考察——中年期の突然の死別がもたらす悲哀過程について—— 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学), 46, 95-100
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70(4), 327-332
- 丹下智香子 (2002). 「死」からの連想語の KJ 法による分類——死生観の構造の検討—— 名古屋大学紀要, 49, 157-168
- 丹下智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15(1), 65-76
- 富田拓郎・大塚明子・伊藤拓・三輪雅子・村岡理子・片山弥生・川村有美子・北村俊則・上里一郎 (2000). 幼い子どもを失った親の悲嘆反応と対処行動の測定 カウンセリング研究, 33(2), 32-44
- 渡邊照美・岡本祐子 (2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, 16(3), 247-256